

ジヨルジェ・アマード 『丁字と肉桂のガブリエラ』(八)

第二部第三章、原文二二一頁から二二七頁までの翻訳

尾 河 直 哉

(承前)

街に解き放たれた悪魔

「悪魔よ去れ！ だわ…これじゃあんたもう、悪魔がイリエウスを彷徨きまわつてゐるって感じよ。独身娘が既婚の男に言い寄られるなんて、聞いたことありますか？」と口うるさいドロテヤが、教会前の広場で呪いの言葉を発している。老嬢たちが困んでいた。

「先生ったら、おかわいそうに。もう少しで正気を失いそうよ。どんな陰気になって、はたで見ても苦しくなるくらい…」とキンキーナが嘆く。

「繊細な方だからねえ、すぐに病気になっちゃうのよ」と付け加える。「もうだいぶ健康が損なわれているみたい」

「心の健康もね。悲しみのあまり、あの恥知らずな女のまわりをうろうろしているし…舗道で立ち止まっておしゃべりまでしてるんだから。」

バジール神父には知らせておいたけど…」

「なにを？」

「イリエウスが墮落した町になり始めているってことよ。いつか神様が罰をお下しになる。不幸をお与えになって、カカオの土地を全滅させるって、そう…」

「で、神父さまは何て？」

「お前の口が災いなんだって。お前は不幸ばかりを望んでいるって、ものすごく怒ってたわ」

「なんでまたよりによってバジール神父のところなんか話に行つたのよ？ あの人、開墾地のオーナーよ。セシール神父のところに行けばよかつたのに。あの方なら貧しいし、淨いし」

「行つたわよ。仰つてたわ。『ドロテヤよ、イリエウスの町に悪魔が解き放たれた。今や好き放題に町を支配している』って。まったくそのとおりよね」

窓辺に姿を見せ、ナシブのボールに満面の笑顔を向けているグローリ

アが目に入らないよう、老嬢たちは顔を背けた。罪の化身を目にするわけにはゆかない。あれこそ悪魔そのものだ。

そのボールでは隊長カピタンがあつと驚くニュースを得意満面に披露していた。リオ・ド・ブラソの所有者で千票以上の票田を押さえているアルティエーノ・ブランダン大佐が、ムンデイーニョ陣営についてくれたのだ。大佐は決意を知らせるため輸出業者の家を訪れた。思つてもいなかった大佐の方向転換に驚いたムンデイーニョは尋ねる。

「なにかご決断のきつかけが？」

大佐は、反論を封じる嘘、しかももつともらしい嘘を考え出して答えた。

「きつかけは背もたれの高い椅子ですな」

不首尾に終わった会談とラミーロの憤怒について、ボールではすでに全員が知っていた。事實は誇張され、大げさな話になっている。激しい口論があつて、老政治家がアルティエーノを家から追い出したというのである。アルティエーノはムンデイーニョの使者として送り込まれ、ラミーロ・バストスに調停と寛容を求めたという話になっている。この話の出所はトニコだった。トニコはたいそう興奮しながら、イリエウスが昔のような撃ち合いと死人の町に戻りそうだと巷で触れ回っていた。

アルティエーノ大佐と直接会った博士ドクトルとニョーガールが語る噂によれば、リオ・ド・ブラソの大農場主がラミーロに、あなたは選挙をする前から負けている、私はムンデイーニョに投票するつもりだからと言ったところ、ラミーロが大いに取り乱したという話だった。その後、トニコがバストス家のために屈辱的な調停を申し出たが、ラミーロが拒絶したのだという。どの噂話にもそれぞれの政治的な偏向が紛れ入りこんでいたが、ただひとつ間違ひなかったのは、アルティエーノが帰ったあと、トニコが医者を呼んだことであつた。デモーステネス先生が衰弱したラミーロ

を診たのである。この日は論評と議論と苛立ちが入り乱れる日となつた。午後のおしゃべりのために書店からやってきたジョアン・フルジェンシオが意見を求められた。

「ドロテヤーと同じ意見だ。悪魔がイリエウスを彷徨き回っているとさつきあの人は言つてたが、そのとおりだな。悪魔の隠れ家がグロリアの家かこのボールか、それは分からないらしいが。ナシブ、サタンをどこに隠した？」

悪魔だけではなかつた。ナシブはそのうえ地獄をまるまるひとつ抱え込んでいた。ガブリエラとの新たな約束はなにひとつ事態の改善をもたらさなかつた。ガブリエラは相変わらずやってきてカウンターの裏に陣取っている。男どもの欲望にとつてカウンターなど脆弱な要塞、なきに等しい距離であつた。今や男どもは肘で小突きあいながら並んでカウンターで立ち飲みしている。ガブリエラを囲んでさながら喜劇が演じられているようで、いささか見苦しい光景だった。判事など破廉恥の極み、ナシブ本人に対してこんなことまで言う。

「覚悟はいいか。もうすぐガブリエラをいただくからな。別の料理女を探しておけ」

「あの娘、なんか期待を持たせるようなこと言つたんですか？ 先生」

「いずれ言うよ…：時間の問題だ」

以前は開墾地を出ることのなかつたマヌエル・ダス・オンサスも、収穫の真つ最中だというのに今では農場のことをすっかり忘れていられるらしい。土地の一部をガブリエラに贈るとまで言っている。老嬢たちの言うことは正しかつた。悪魔がイリエウスに解き放たれ、人々の頭の中をひっくり返してしまつたのである。ついにはガブリエラの頭まで。つい二日前もドナ・アルミンダはこんなことを言つていた。

「またもや偶然の一致さ。こんな夢を見たんだよ。ガブリエラがいま

にも立ち去ろうというときになって、あの娘が望むなら開墾地をひとつをあんな娘の名義に書き換えてやるようマヌエル大佐が連絡してくるっていう」

女たちの頭も軽くなっていた。広場に目を遣れば一目瞭然。そこには並木道のベンチに腰掛け、技師と語り合うマルヴィーナの姿があった。マルヴィーナがイリュエウスでいちばん知的で性格もなにもかも、あらゆる点で良い娘だとジョアン・フルジェンシオは言っていなかったか？

それなのに、衆人環視のなか、ああして既婚者と愛を語らっている。正気を失っている証拠ではなからうか？

ナシブがバールの広いテラスの端まで行つたときだった。考えごとに耽つていたナシブは、家から出て広場に向かうメルク・タヴァーレスの姿に気づいてぎくつとした。

「見てみる！」と叫び声を上げた。声を聞いた客たちは、向き直った。

「二人の方へ行くぞ……」

「口論でもおっぼじまるか……」

娘も近づいてくる父親に気づいて立ち上がった。今し方畑から戻ってきたにちがいない。まだ長靴を脱いでいない。バールでは室内の客が席を立つて外に出てきている。

「父がこっちに向かつてくるわ」

マルヴィーナがそう言うと、技師は真っ青になった。

「どうしよう」声が震えている。

暗い顔をしたメルク・タヴァーレスが、小ぶりの鞭を手に持ち、娘をじつと見据えたまま二人の近くで立ち止まった。技師がそこにいないかのように目も見えない。鞭を入れるような声でマルヴィーナに言った。

「さっさと家に帰れ！」鞭が長靴に当たってパシッと乾いた音がする。

緩慢な足取りで歩く娘を見つめながら大佐はじつとしていた。技師は地面に釘付けになり、額にも汗がじつとりと滲んでいる。マルヴィーナが玄関を通って家のなかに姿を消すと、メルクは鞭を持ち上げてローム口の胸に突き立てた。

「港口の調査はもう終わったそうですな。それなのに、このまま残つて工事の監督をしたいと電報を打ったとか。わしならそんなことはしませんな。交代要員を送るよう電報を打って、要員が来る前にさっさと帰るでしょう。あさつて船が出ます」と言つて、鞭を上に向けた。先端がローム口の顔に触れる。「あさつて、それが期限です」

メルクはきびすを返すと、テラス席にできた人だかりでも訝るよう、バールへ向かつて歩き出した。野次馬は席に戻ると慌ててお喋りを再開し、横目でちらちら様子をうかがう。メルクはバールにやってくるナシブの背を叩いた。

「調子はどうだい？ コニヤックをくれ」

ジョアン・フルジェンシオを見つけると、横に腰掛ける。

「やあジョアンさん。なんでも、娘に悪い本を売つてたそうじゃないか。ひとつお願いだが、こんりんざい何も売らんでくれないか。本は学校の教科書だけにしてくれ。あとはなんの役にも立たんからな。人を墮落させるだけで」

ジョアン・フルジェンシオは冷静にこう答えた。

「本は売るために置いております。お客さんが欲しいといえは売らないわけにはいきません。そもそも悪いな本とはどんな意味でおっしゃってるんですか？ お嬢さんは良い本しかお買い求めになりませんよ。最良の著者の。良い機会だから申し上げますが、お嬢さんは知的でたいへん有能な方です。そのところをぜひご理解いただいて、けつして粗略な扱いをなさいませぬように」

「私の娘だ。私に任せてもらいたい。私にしか治し方が分からない病気もあるんです。良い本だろうが悪い本だろうが、娘にはこんりんざい買わせません」

「決めるのは娘さんです」

「わたしも決めます」

どうなつても知らないぞ、とでもいうかのようにジョアン・フルジェンシオは肩をそびやかした。ピコルフィーノがコニヤックを持つてくる。メルクは一気に飲み干すと立ち上がるとした。ジョアン・フルジェンシオがその腕を押さえた。

「メルク大佐、まあちよつと。娘さんの言い分を落ち着いてよく聞いてあげてください。そうすれば娘さんも大佐の言うことを聞きます。暴力をふるえば、あとできつと後悔することになりますよ」

メルクは怒りを必死に抑えようとしている。
「ジョアンさん。あんたは知り合いだし、お父さんとは友人だから、あんたの言うことにも耳は貸してるが。娘のことは放つといてください。わしゃ後悔しないたちなんぞね。いづれにせよ、ご忠告には感謝します」

鞭で長靴を叩きながら広場を横切つて行った。

近くのテーブルから様子を見ていたジョズエーがやってきて、ジョアン・フルジェンシオの隣の、いましがたメルクが立ち去った椅子に座る。

「あの人、どうするだろう？」

「馬鹿なことやらかすんじゃないか」と言つて、情け深い目でジョズエー先生をじつと見る。「といつても、別段驚くようなことでもないが。あんただつてずいぶんしてんじゃないの？ 同じようなこと。あの娘さん、ちよつと変わつてゐるからなあ。それで、みんなから馬鹿扱いされちゃうんだな……」

メルクは「モダン・スタイル」の家の玄関をくぐつた。パールの会話はアルテイーノ・ブランダン、バストス大佐、政治的な混乱の話題に戻つていた。技師は並木道のベンチから姿を消している。ジョアン・フルジェンシオ、ジョズエー、舗道に突つ立ったままのナシブ、この三人だけが大農場主のようすを見守つていた。

居間では恐怖に身をすくませた妻が夫から目を離せずにいた。まるで苦行でやつれた聖女のような。黒人ファグンデスが言う通りである。

「あれはどこに居る？」

「上の部屋に行きました」

「下りてくるように言え」

大佐は長靴を鞭で叩きながら居間で待つ。マルヴィーナが入ってきた。母親は部屋をつなぐ扉のところにいる。マルヴィーナは頭を昂然と上げ、背筋をびんと張つて、誇り高く決然と父親の前に立ちはだかつて、見つけた。目に恐怖を宿しながら母親も夫をじつと見つめている。メルクが居間を歩きながら言う。

「言うことがあるだろ」

「なんのこと？」

「その偉そうな態度はやめろ！」と大佐が叫ぶ。「おれはお前の父親だ。父親には敬意を払え。口の利き方には気を付ける。あの男のことはどう説明する？ イリエウスじゃその噂で持ちきりだ。開墾地にまで聞こえてくる。あいつが既婚者だつてこと知らなかつたなんて言わせんぞ。公言しているくらいだから。さあどう説明する」

「なにをどう言えば良いのよ。お父さんなんか何言つたつて、どうせ分かつてくれなれないじゃない。ここじゃ私のこと分かつてくれる人なんかいないのよ。もう何度も言つてゐるけど、身内が勝手に決めた結婚を甘受するつもりなんかありませんから。相手が誰だろうと、大農場主の飯炊

き女にも、博士の女中にも収まるつもりはありませんからね。私は私の道を行います。学校があと一年で終わるから、そしたら働くつもりよ。事務所かどこかに入って」

「おまえの勝手な望みは禁じる。わしが言うことを聞いていけば良い」

「わたしは自分がしたいことだけしかしません」

「なにを？」

「だから、わたしがしたいことよ……」

「黙れ！ 一家の面汚し」

「怒鳴らないですよ。私はあんなの娘であって、奴隷じゃないんだから」

「マルヴィーナ！」と母親が叫んだ。「お父さんにそんな口を利くもんじゃありません」

メルクは娘の手首をつかむと、顔に平手打ちを見舞った。マルヴィーナは真っ赤になって言う。

「じゃあ、家を出てあの人と一緒にになります。いいわね」

「ああ、なんて……」母親は両手で顔を覆った。

「この雌犬！」父親は鞭を振り上げると、娘をとどころかまわらず打擲し始めた。

足、尻、腕、顔、胸。唇が切れて血が流れ出す。マルヴィーナは呻き声を上げた。

「打てばいいでしょ。あの人と出てくから！」

「なら、殺してやる」

父親は娘をソファに突き飛ばした。娘はうつぶせに倒れた。父親はまた腕を上げる。振り上げられては振り下ろされる鞭は、そのたびにビュンビュンと鳴る。マルヴィーナの叫び声が広場に響き渡った。

母親がおずおずとした声で懇願する。

「止めてよ、メルク。もう止めて……」

と、扉のところのいた母親は突然夫に飛びかかり手をつかんだ。

「あたしの娘を殺さないで！」

夫は息を切らしながら手を止めた。マルヴィーナがソファですすり泣いている。

「部屋に行け！ 次の命令があるまで外には出るな」

ボールではジョズエーが拳を握り、唇を噛みしめていた。ナシブは虚脱状態。ジョアン・フルジェンシオは頭を横に振っている。他の客たちも呆然として声が出なかった。グローリアが窓辺で悲しげな笑みを浮かべている。

だれかが言った。

「鞭打ちが終わったな」

岩壁の処女

黒々とした岩壁が海に向かってそそり立っていた。その側面に波が当たっては白い泡となって砕け散る。岩の深い窪みから威嚇するように鉄を突き立てて出てくるカニ。朝と夕には、すばしこいたずらつ子どもが岩をよじ登って「大旦那様と用心棒ごっこ」をし、夜ともなれば、飽くことなく岩を穿つ潮騒が聞こえてくるのだった。ときおり砂浜で奇妙な光が点る。光は岩をよじ登り、窪みに消えたかと思うと、再び現れてはまた登ってゆく。黒人たちによれば、それは人魚の魔術で、悲しみに暮れた水の母ドナ・ジャンナイナが緑の火に変身したのだという。宵闇の底には愛の優しい囁きと激しい喘ぎが渦を巻いていた。乞食、浮浪者、宿無しの娼婦など、最も貧しい男女が岸壁のあいだに隠れた砂浜に愛の床を求めてやってきて、砂の上で組み合うからだだった。眼前には荒海が吠え、背後には獐猛な町が眠っている。

月影のない闇夜に、大胆にも岩壁をよじ登るほっそりとした人影があった。毅然と前を見据え、靴を手に素足で登るマルヴィーナの姿だった。娘たちはベッドで眠り、勉強やパーティーや結婚を夢に見ている時刻である。マルヴィーナも夢を見ていた。目を覚まし、岩壁に登りながら。

岩壁には、風雨で岩壁が穿たれ、大海原に向かった大きな椅子のようになっている場所がある。恋人たちがやってきて座る場所。投げ出した足の下は深淵だ。碎ける波が、まるで人を誘い込むように白い腕を伸ばしている。マルヴィーナはそこに座り、過ぎ行く時間を指折り数えながら、不安な気持ちで待っていた。

その少し前、おし黙ったまま身を固くした父親が娘の部屋に入っていた。本や雑誌を手に取り、手紙や書類を探す。父親に残されたのはバリーアから来た雑誌数冊と、鞭で紫色の痣ができた肉体に宿る苦痛と反抗、それだけだった。「あなたは私が再び出会った生命、失っていた喜び、死んでいた希望、わたしのすべてなのです」と書かれた恋文は、マルヴィーナが胸にしまっていたものである。以前母親もこの部屋に入り、食事を運び、娘の相談に乗ってやり、死にたいと漏らしていた。こんなに誇り高くて、こんなに頑固で、こんなに喧嘩っ早い父親と娘にはさまたれて、これまでどうして生きてこられたのかしら？ 諸聖人さま、どうかお願いします、あたしを死なせてください。いずれやってくる宿命を、情け容赦ない不幸を見ないで済むように！

母は娘を抱きしめると、マルヴィーナは言ったものだ。

「お母さん、わたしお母さんみたいに不幸にはならないわ」

「ばかなこというんじゃないよ」

それ以上は何も言わなかった。いよいよ決断の時が来たからだ。マルヴィーナはローム口と出てゆくことにした。生きるために。

マルヴィーナの父親はいちばん固い石のように、割れることはあっても、曲がることはなかった。幼いころ農場でマルヴィーナはよく抗争時代の話を聞かされたものだった。そのころは夜になると、父親を殺そうとする用心棒が外をうろついていたらしい。ところがその後、マルヴィーナは自分の目で現実を見ることになる。囲いを壊して逃げた家畜が放牧地に入りこんだ程度の、実にささいなきっかけだった。隣地の所有者アルヴェス家と喧嘩になった。相手の誇りを傷つけるような言葉の応酬があったあと、争いが始まった。待ち伏せ、用心棒の出番、撃ち合い、またもや流血沙汰。マルヴィーナはアルイージオおじさんが、肩を血で真っ赤に染めて家の外壁にぐったりもたれている姿をまたもや目にした。メルクよりもはるかに若い、ほっそりとした快活な美男子。馬や牛などの動物が好きで、自分で子犬を育て、居間で歌も歌えば、マルヴィーナをおんぶしたり、一緒に遊んでくれたりもする。生きるのが好きな人だった。それは六月のことだった。たき火や花火の季節だというのに、通りではねずみ花火の代わりに銃が火を噴き、森ではしきりに待ち伏せがかけられていた。マルヴィーナがいつもやつれた苦行僧のような顔だと思っていた母親の顔には、娘が生まれる以前、大抗争時代に眠れない日が続き、自分の意思を通そうとして大声で命令を喚きちらすメルクに怯えていた疲労が色濃く影を落としていたのである。その母親が、銃弾にえぐられたおじの肩を手当していた。ところがメルクがおじにかけて言葉はこれだけだった。

「こんな傷で戻ってきたのか。用心棒たちはどうした？」

「一緒に帰ってきたけど…」

「おれが何て言ったか覚えてるか？」

アルイージオは訴えるような目でメルクを見ただけで返事をしなかった。

「おれが何て言ったか。何があつても空き地を離れるなど言つたはずだぞ。なぜ離れた？」

手当をする母親の手が震えている。華奢なおじは、生来、争いごとや闇夜の撃ち合いに不向きだった。がっくりと頭を垂れる。

「もう一度行つて来い。用心棒たちと一緒に、いますぐ」

「きつとまた撃つてくるよ」

「望むところだ。撃つてくりゃ、他の用心棒を連れておれが行く。背後から攻撃すりゃ、やつらは全滅だ。お前が最初の銃撃戦で逃げ帰らなけりゃ、今ごろ皆殺しにしてたところよ」

おじは従つた。マルヴィーナはその目で場面を目撃したのだった。アルイーゾは馬に乗り、家、ベランダ、まどろむ家畜の囲い場、吠える子犬を眺めた。それが見納めだった。外で待つ配下の者たちと出で行つた。発砲音が鳴り響いた。マルヴィーナの父親が命令を出す。

「行くぞー！」

父親は勝つて戻つてきた。アルヴェス家は全滅。馬上にはうつ伏せになつたおじの死体に乗つていた。快活な美男子だった。

人生を愛し、生にひりひりするような執着を示し、メルクの命令に唯々諾々と屈せず、頭を下げることもなければ、メルクの前で小声で話すことも厭うマルヴィーナのこうした性向は、いったいだれから受け継いだのだろうか？ おそらくメルクその人からだ。マルヴィーナは家や町、掟やしきたりを早くから嫌つていた。メルクの前で震えているばかりで、なにひとつ相談されることがなく、いつもへいこら頷いているだけの卑屈な母親も。メルクは到着するや、妻に命令口調で言った。

「準備しろ。今日、トニコの登記所に行つて書類に署名してくるから」

母親はそれが何の書類なのか、買うのか売するのか、訊こうもしないし知ろうともしない。母親の気晴らしは教会だった。メルクがすべて

を支配し、すべてを決める。家事だけは母親が見ていて、采配を揮えるのはそこだけだった。父親がキャバレーや娼家に通つて娼婦に大枚をはたき、ホテルで遊び、バールで友人たちと飲むその一方で、母親は夫の命令に聞き従い、家で萎んでゆくばかり。なにかにつけ夫の鼻息を窺うやつれて卑屈な母親は、自らの意思というものを一切持たず、娘に命じることさえなかつた。ぜつたいあなるものか。マルヴィーナは思春期に入る早々、自らに誓いを立てた。マルヴィーナは自分の意思を抑えなかつた。父親もときどき娘のわがままを聞き入れてやり、心配そうにじつと様子をつかがつた。細かく見ていると、娘のなかに自分の姿が見える。とりわけ、こうありたいと念じているときの娘のなかに。しかし結局、父親は従順な娘を望んでいた。高校、大学と進んで勉強を続けたと言つたとき、メルクはぴしゃりと云つたものだ。

「女博士なんぞいらん。修道女学校に行つて裁縫、読み書き、ピアノを習え。それ以外は必要ない。博士でございなんて厚かましい女は、自ら好んで身を滅ぼすようなもんだ」

母親のように生きる既婚女性がいることにマルヴィーナは気づいていた。夫に忍従する女。尼さんよりも始末が悪い。マルヴィーナは心の中で誓うのだった。わたしは絶対にああならない。絶対に、絶対に、絶対に。女学校コレージュの中庭では、金持ちの家の、若く朗らかな娘たちがお喋りをしている。娘たちの兄弟はバイーアバイーアの高校や大学に行つていた。小遣いがもらえるので、お金を湯水のように使つて好き放題している。いつばう娘たちにとっては、この短い青春時代だけが自由な時間だった。発展クラブのパーティー。未来のない恋。恋文の交換。朝の映画館でおおずと盗まれる唇。あるいは庭の門でときおり交わされるもつと深い接吻。ところがある日父親が友人を連れてくる。戯れの恋も一巻の終わり。婚約時代の始まりである。娘たちが嫌がるうとも父親は押しつける。若者

が娘の両親に気に入られたため、恋人と結婚できた例もたしかにあった。だが、だからといって何か違うわけではない。父親が選んで連れて来た夫だろうと、運命の神が連れてきた夫だろうと、結婚してしまえばみな同じ。夫とは結局妻の主人であり、支配者であって、命令を發し、言うことを聞かせるだけだった。夫には権利、妻には義務と遠慮。家族の名誉と夫の名声を守り、家と子供に責任を持つ。それが妻の務めというわけである。

年上で女学校の学年も上のクララがマルヴィーナの親友だった。二人はよく学校の中庭でひそひそ話をしては笑っていた。これほど快活で、生命力に溢れ、健康な美しさに恵まれた娘はいなかった。タンゴを踊り、いつも恋のアバンチュールを夢見ている。これほど情熱的でロマンチック、反抗的で大胆な娘である。結婚は、当然、恋愛結婚であった。いや、少なくとも本人はそう信じていた。相手は時代遅れの大農場主ではなく、法学博士。しかも詩の朗読もできるのだ。ところが結果にはなんの変わりもなかった。クララになにが起こったのだろうか？ 昔のクララはどこに行ったのか？ あんなにたくさんあった夢や計画はいついどこに埋葬されてしまったのか？ 今では教会にせつせと通い、家事に埋没し、子供の面倒を見ているクララ。化粧すらしていない。博士が嫌がるからだ。

こうしてすべては同じままだった。まるで変化など存在せず、暮らしも変わらなければ町も成長しないかのよう。女学校コレージュではだれもが、愛に死んだアーヴィラ家の処女オフェニージャの物語に夢中だった。男爵の奥方も嫌、砂糖農園の妻も蹴ったのだ。兄のルイス・アントーニオは次々と花婿候補を連れてきたが、オフェニージャが結婚を夢見たのはただひとり皇帝だけだった。

マルヴィーナは、ひそひそ声で人の噂話ばかりしているこの土地が

大嫌いだった。嫌いな土地の暮らしに戦いを挑んだ。まずは読書である。ジョアン・フルジェンシオが指南役を務め、読むべき本を薦めてくれた。マルヴィーナはイリエウスの外に別世界があつて、人生は美しく、女性は奴隷でないことを知った。大都市では仕事にありつけるし、生活費も稼げれば自由も得られるのだ。イリエウスの男など眼中になかった。イラセーマは小説の題名を取って「青銅の処女」とマルヴィーナを称していたが、それはこの娘が恋人を作らなかつたからである。マルヴィーナの周りをうろろろしていたのはジョズエー。町の外からやつてきた男である。ソネットを書いては新聞に發表していた。女学校コレージュの中庭では、「つれないMに捧げる」とイラセーマが大声を出してソネットを読む。不貞を働かれた夫が妻を殺した日には、マルヴィーナはジョズエーとの話中に夢中になり、数日間恋心を抱いたこともある。もしかするとこの人は違うかもしれない、そう思った。結局他の男と同じだった。すぐに化粧を禁じ、イラセーマとのつきあいを止めると言ってきた。「みんな言っているよ、きみのつき合う相手じゃないって」ミザエル大佐のホームパーティーにマルヴィーナが行くことも御法度。ジョズエーが招待されていないからである。こんなことがこのひと月足らずのあいだに起こったのであつた。

イリエウスのなかでマルヴィーナが唯一気に入っているのが新築の自宅だった。リオの雑誌で見つけた家をモデルにしている。父親は娘の好きにさせてくれた。家などどうでも良かったからである。ムンデインヨ・ファルカンはリオで食いっぱぐれている風変わりな建築士を連れてきていた。マルヴィーナはムンデインヨの家が大好きで、ムンデインヨ自身にも憧れていた。あの方はきつと違う。私をここから連れだして、他の土地に連れて行ってくれるわ。フランスの小説に語られたような土地に。マルヴィーナにとってそれは恋、つまり抑えきれない

情熱ではなかった。自由に生きる権利を与えてくれる人、イリエウスじゅうの妻を縛る恐怖の運命から自由にしてくれる人ならだれでも良かった。黒服で教会の戸口にたむろしながら独り身のまま老いてゆくならまだしも。さもなくば、シニャジーニャのようにリボルバーで撃ち抜かれて死ぬことになりかねないのだから。

マルヴィーナの真意を悟るとすぐ、ムンデイーニョは離れていった。マルヴィーナは苦しんだ。希望が潰え去ったのだ。ジョズエーは要求と命令ばかりを肥大させ、ますます手に負えなくなっていた。そんな頃だった。ルームロがやってきた。水着一枚で浜辺を横切り、抜き手を切つて波をかき分けて行ゆく。あのひと、やっぱり考え方が違うわ。可哀想に、奥さんの気が違つていて。ルームロはマルヴィーナにリオの話をしてくれた。結婚がなんだつていうの？ ただの形式じゃない。働いて、あの人を助けてあげよう。恋人だつて、秘書だつてかまわない。一生懸命勉強すれば大学だつて行けるし、そうすれば独立だつてできるわ。私たち、愛だけで結ばれることになるのね！ ああ、マルヴィーナがこの数ヶ月をどんなに熱い思いで過ごしたことか：町中が自分の噂をしていること、女学校でもこの話題で持ちきりなことを知っていた。離れていった友だちもいる。イラセーマがその筆頭だった。それもマルヴィーナにとつて大したことではなかった。なにしろ浜辺の並木道でルームロと会つて、忘れがたい会話を交わすことができるのだから。午前中、二人は映画館で食うような接吻を交わし、あなたに出会えてはくは生まれ変わった、とルームロが囁く。メルクが田舎に引つ込んでいるとき、マルヴィーナは夜、家が寝静まつたところを見計らつて、岩壁で逢い引きを重ねた。岩に穿たれた椅子のような場所に座ると、技師の手がマルヴィーナの体をあちこちとまさぐる。興奮した技師は息を切らしながら囁くのだつた。なぜいま、あそこの浜辺じゃだめなんだい？ わたしイ

リエウスを出たいの。イリエウスを出たら、あなたのものになるわ。二人は脱走の計画を立てた。

鞭で打たれ、閉じこめられた部屋のなかで、マルヴィーナはバイーアの新聞でこんな記事を読んだ。「イタリア上流社会を揺るがすスキャンダル。王子ヴィットーリオとスペイン王女ベアトリスの娘アレッサンドラ王妃が、両親の家を飛び出し一人暮らし。婦人服店で店員として働く模様である。父親がミラノの資産家ウンベルト・ヴィスコンティ・デイ・モドローメ男爵と結婚させようとしたことが原因。尚、同王妃は平民で技師のフランコ・マルティーニと恋愛中だつた」わざわざマルヴィーナのために書かれたような記事だつた。鉛筆を手にとると、新聞の余白に、ルームロに宛てて逢い引きの連絡を認めた。女中がそのメモをホテルにもつて行き、手ずから技師に渡す。その晩、もしルームロさえ望めば、マルヴィーナは技師のものになつたはずである。娘はすでに腹を決めていたのだ。ここを出よう。外で生きようと。ただ唯一気がかりだつたのは——といつても、その日になつて初めて気づいたのだが——どうしても父親を苦しませてしまうことだつた。そして事実、父親はその後大いに苦しむことになる。ただ、今はマルヴィーナにとつてそれも気がかり以上のものではなかった。

湿つた岩に腰掛け、深淵に足を投げ出して、マルヴィーナは待つていた。隠れた砂浜ではカップルが歓びの呻き声を漏らしている。計画は細部に至るまで吟味され、完璧だつた。マルヴィーナはじりじりしながら待った。波が足下で碎け散り、泡が飛ぶ。あの人、なぜ来ないの？ 私より早く着いているはずなのに。マルヴィーナはメモに時間まで指定しておいたのだ。どうして来ないのかしら？

ホテル・コエーリヨでは交通・公共土木事業省の有能な技師ルームロ・ヴィエイラが扉を閉ざし、眠ることもできずに、恐怖に身を震わせ

ていた。ローム口は女性関係で馬鹿げた失敗を繰り返していた。いつも窮地に陥り、立ちゆかなくなる。それでも懲りずに、また独身女性を口説くのだった。リオでも、逢い引きを重ねていたアントニエータとかいう女性の粗暴な兄弟が怒りを爆発させる寸前で逃げ出した。あいつをとちめてやると兄弟四人が集まったところだった。イリエウス行きに飛びついた裏にはこうした訳があった。金輪際、年頃の娘には見向きもすまい、そう心に誓った。ところで、イリエウスの仕事はかなりウマイ話だった。あちこちから資金が掻き集められ、しかも、急いで仕事を終わらせて報告書を提出し、早急に浚渫船を要求できればムンディーニヨ・ファルカンが大金を出すと請け合ってくれた。そして、その通りにした。次いで、港口の修理と浚渫の監督をできるよう省に要請するということでムンディーニヨと意見が一致した。外国船が初めて港口を通過したときにはそれ以上の金を出すと輸出業者は約束し、技師は昇進をかけて努力した。これ以上何が望めるだろう？ それなのに技師はまたしても独身娘にちよっかいを出し、映画館で痴漢めいた行爲をしたうえ、できもしない約束を口にしたのだ。その結果、電報で後任を頼み、ムンディーニヨと不愉快な会話をする羽目になった。リオについたらすぐに、浚渫船とタグボートを送るまで大臣に執拗に食い下がることを請け合った。それがローム口にできるすべてだった。街角で鞭打ちに遭いたくなかったら、人みな寝静まった真夜中に鉄砲の弾を喰らいたくなかつたら、イリエウスにだけは居られない。部屋にじっと閉じこもっていたのはそういうわけで、船に乗るときしか外に出ないつもりだった。ところがそこへ、あの無分別な娘が岩壁での逢い引きを指示してきたのだ。収穫も終わろうとしている開墾地にメルクがすぐ戻るとは考えられない。無分別な女。ローム口は常軌を逸した無分別な女を好きになり、そういう女ばかりに手を出そうとする病的な性癖があったのである……

マルヴィーナは岩山の高みで待つていた。下では波が呼んでいる。男は来なかった。マルヴィーナは午後、死ぬほど恐ろしかったが、今になってやつとすべてが分かった。波が泡になって飛び散り、水がマルヴィーナを呼んでいる。一瞬、深淵に身を投げ出そうかと考えた。そうすればすべてを終わらせることができる。だが、マルヴィーナは生きなかった。イリエウスの外に出て働き、ひどかどの人物になりたい。世界を足下にねじ伏せたい。それなのに死んでどうする？ これまで立ててきた計画、ローム口の誘惑、その言葉、ローム口の下船数日後に書き送った付け文を、マルヴィーナは波に投げ込んだ。自分が犯した間違いに気づき始めていた。イリエウスから脱出するために、これまで一つの道しか想像してこなかった。夫にせよ恋人にせよ、男の腕にぶら下がって切り抜けようとしてきたのだ。なぜかしら？ イリエウスの影響が吹っ切れていなかったんじゃない？ 自分ひとりですっきり道を決めることができてなかったんじゃない？ 今度こそ独りで、自分の足で外に出て、この世界をねじ伏せてやるわ。そう思いながらマルヴィーナはその場を立ち去った。向かう先は死の扉ではない。生きたかった。猛烈に生きたかった。果てしない海のように自由に。靴を捨てると岩壁を下り、これからのことを考え始める。体が軽くなったように感じた。なによりも良かったのはあの男が来なかったことだ。あんな卑怯な男となんか、このさき生きてゆけないわ。

永遠の愛、あるいは壁を乗り越えるジヨズエー

『日刊イリエウス』の読者が最もよく目を通す誕生、受洗、逝去、結婚という欄の上には、「つれなく、冷たく、高慢で、思い上がったM……に捧げる」例の連作ソネットがイタリックで印刷されていたが、ジヨズ

エーはそのソネットで烈しく韻を踏みながら、拒まれてもなお永遠に生き続ける愛を繰り返し訴えていた。ジョズエー先生の情念を特徴づける美質はあまたあつて、いづれも甲乙つけがたかつたが、なかでもひとときわ目を惹いたのが、新聞に十ポの活字で印刷されたこの愛の永遠性である。先生は韻を得るために苦勞してアレキサンダー格や十音節を駆使し、この永遠性を謳った。情念の畳重につれて愛はさらに高まり、永遠と不死にまで至る。シニヤジーニヤとオズムンドの殺害による興奮が極まったところ、マルヴィーナの高慢はついに砕け散り、恋が始まった。長い詩の時代が、死を以てしても、時の流れを以てしても決して破壊することのできない不壊の愛が顕揚される時代がやってきたのである。「永遠そのもののように永遠で、既知未知を問わずあらゆる空間よりも広く、不死の神々よりもさらに不死の」と先生詩人は書いている。

信念もあつたが、同時に便宜上のこともあつて——こうした長い詩は、もしきちんと韻を踏み、律を整えようとすると、一生かかっても終わりそうもないから——ジョズエーは、三年遅れでイリュウスに影響を与え始めたサンパウロの有名な『近代芸術週間』(一九二二年に起ったブラジルのモダニズム運動)にやがて帰依するようになった。モデーロ書店で博士、ジョアン・フルジェンシオ、ニョーロガールといった人々と、あるいはルイ・バルボーズ文学会でアリ・サントスと文学談義に耽つているときのジョズエーの語り草を借りれば、今やマルヴィーナと、韻律の桎梏から解き放たれた現代詩のために詩を作っているらしい。だって、マルヴィーナの家は「モダン・スタイル」じゃないか? 趣味のなかにまでぼくらは双子の魂が息づいてるんだ。ジョズエーはそう考えていた。尋常でなかったのは、永遠そのものよりも長いこの永遠、不死の神々がひとつになっても敵わないほどのこの不死が、ジョズエーとの関係を断ち切つてローム口とのスキヤンダルに娘が突入してからもますます膨

張し、今度は政治的小冊子の散文にまで進出したことであつた。先生の気持ちがよく分かるナシブは、憂愁につき合えるだけの心の度量をパールで示していたし、書店や文学会の友人たち、また一部の物好きもジョズエーの味方になつてくれてはいた。だが、なぜか、ジョズエーの苦悩はスペイン人アナキストである靴屋のフェリーペに慰めを見いだすようになつていった。たしかにスペイン人靴修理職人は、暮らして社会、女と神父をめぐつて思いをめぐらせている町でただひとりの哲学者だつた。ただその中身が最悪だつた。ジョズエーは真つ赤な表紙の小冊子を貪るように読み、詩を抛り出し、めつたやたらと書き殴る散文家として人生を歩み始めた。それは感傷的な権利要求を連ねた散文だつた。ジョズエーは身も心も無政府主義に帰依してしまつたのである。社会体制を憎み、古いものを吹き飛ばす爆弾やダイナマイトを礼讃し、あらゆるもの、あらゆる人に対する復讐を叫ぶ。博士はその気取つて大仰な文体を絶賛していたが、結局のところ、こうした情動の暗い高揚はすべてマルヴィーナにたいして向けられていた。女性にたいする幻滅を、とりわけ、だれもが結婚したがる大農場主の美しい娘たちにたいする幻滅をジョズエーは年がら年中口にしていた。「あいつら、ただの尻軽だ!」修道女学校の制服を着て若々しいそぶりを見せようと、人を誘惑するようなエレガントな服を着ていようと、娘たちが目の前を通ればかならず吐き捨てるようにそう言う。だが、ああ、マルヴィーナに捧げた愛だけは、あのいきり立つた散文にあつても永遠に生き続けていた。胸の裡で死ぬことを殺すことだけはなかつたからである。ペンの力で社会と女心を変えたと思つていたのである。

上流社会の娘たちにたいする憎悪に発し、政治的小冊子の怪しげないデオロギーに基づいて、庶民の女に近づいていったことはジョズエーに

とつてごく自然な成り行きであった。初めてグローリアの孤独な窓辺に赴いたとき——そのさいの革命的身振りは、ジョズエーの怒りに満ちた政治的キャリアにおいて唯一の戦闘的行為だったが、その行為を思いついたのも実行したのも、実は、無政府主義アナキズムに帰依する以前である——意図していたのは、技師との恥知らずな会話によって自分がどれほどの狂気に陥っているかマルヴィーナに示そうということだった。なんの効果もなかった。マルヴィーナは気づいてさえいなかった。ロームロとの会話に夢中だったからである。だが、世間には無謀で下品な行為としてかなりの反響を惹起した。もっとも、全員の口端にのぼるほどの話題にはならなかった。当のマルヴィーナとロームロの恋や『日刊イリエウス』の放火事件、行政監督局の役人殴打事件といった話題に喰われてしまったからである。

ジョズエーのこの勇敢な行為を讃えたのがフェリーペだった。こうして靴職人との友情が始まった。ジョズエーは小冊子をシネマ・ヴィトリアの二階にある自室に持っていった。永遠の愛は横に置いたまま、おれには値しない女だと言つてはジョズエーはマルヴィーナを軽蔑する。その一方でグローリアをしきりに持ち上げた。きつと暴力によって汚れた体になり、社会の片隅へと追いやられたのだろう、あの娘こそ社会の犠牲者だ。つまり聖女だと。こうしたことを——もちろん名前前は伏せて——書いては、毎号、小冊子の頁を埋めていた。しかもこうしたことはたんなるポーズでなかったから、ジョズエーの苦しみは大変なものだった。頭のなかで勝手な想像に耽つてみる。イリエウスを最も醜いスキヤンダルで汚してやろう。おれはグローリアに関心がある、欲望を抱いているし——愛はまだマルヴィーナにあった——しかるべき敬意も抱いている、と町なかで声高に叫ぶんだ。グローリアと窓辺で話し、腕を組んで街を歩き、小さな部屋を与えて住まわせ、そこで原稿を書いたり休息

したらどうか。社会から切り離され、周囲から見捨てられ、故郷から追放されたところで二人一緒に暮らすんだ。そしてマルヴィーナの顔めがけて憎悪を投げつける。「おれがどうなったか見たか？　すべてお前の責任だ！」と叫びながら。

ジョズエーはバールで飲みながらこうした妄想をナシブに語った。アラブ人は目を見ひらき、敬虔な面もちで真剣に聞いている。ナシブだつて、ガブリエラと結婚できるならすべてを犠牲にしても厭わないつもりなのだ。ジョズエーにけしかけるでも、思いとどまらせるでもなく、ナシブはぼつりとこう呟いた。

「マリーヤ革命になるな」

それこそジョズエーの望むところだった。しかしジョズエーが二度目に窓辺を訪ねると、グローリアは微笑みながらも窓辺から引つ込んでしまった。その後、これ以上ないほど下手くそな字で書いた短い手紙を女中を使って送ってきた。香水を薫き染めているが、末尾には「書き直しの字ばかりでごめんなさい」とある。たしかに書き直しがたくさんあつて、判読にひと苦労する手紙だった。窓辺にはいらつしやらないで。大佐に知られたらお大事です。ここ数日はとくに。もうすぐ来て泊まるはずだから。じいさんが帰つたら、どうやって逢つたらよいか知らせますとある。

ジョズエーにとってこれは新たな打撃だった。そこで今度は、上流社会の娘も庶民の女も一緒くたにこき下ろす。グローリアが『日刊イリエウス』を読まないことだけが幸いだった。なにしろグローリアの慎重さにこんな唾をかけたからである。「金持ちも貧乏人も、貴族も平民も、貞淑も尻軽も、女という女をわたしは唾棄する。女が心を動かすのはただエゴイズムと卑しい私利私欲だけだ」

マルヴィーナの恋の行方を窺いながら煩悶し、文章を書き、呪詛し、

袖にされた男というひどくロマンチックな役回りを演じることに夢中だったしばらくのあいだ、ジョズエーは孤独な女の窓辺に目を遣ることさえなかつた。その期間は、ガブリエラにまわりついて、一時的に戻って書き始めた押韻詩を捧げ、家具調度は貧しくても芸術の豊かな小部屋に住もうとしきりに持ちかけていた。ガブリエラは微笑みながら、喜んで耳を傾けていた。

だが、メルクがマルヴィーナを打擲した午後、ジョズエーはグローリアが悲しそうな顔をしていることに気づいた。打擲された娘が、捨てられたジョズエーが、そしてまた独りになってしまった自分自身が悲しかったのだ。すぐに短い手紙をジョズエーに書き、窓辺に顔を出して、そこで手紙を渡した。

数日後の夜、静寂が広場を領し、最後の夜遊び人が帰宅すると、ジョズエーは半開きになった重い扉をくぐった。唇がジョズエーの唇に押しつけられ、腕が華奢な背を掻き抱き、部屋の中へと引きずり込む。こうしてジョズエーはマルヴィーナのことも永遠不滅の愛も忘れた。

東の空が明るくなり、早起き組が魚屋に向かい始める前に衣ぎぬの別れがやって来た。グローリアが唇を預け、炎のように熱く蜜のように甘かった夜の最後の接吻を貪り終えたとき、ジョズエーはこれからの夢を語った。腕を組んで街を歩こう。この社会に真つ向から挑むんだ。シネマ・ヴィトリリア二階の小さな部屋に二人で住まないか。苦行僧のように貧乏だけど、愛だけは億万長者のように豊かだ……こみたくに豪華で、女中もいれば香水も宝石もある家はプレゼントでできないけど。だって大農場主^{ファシエンティ}じゃないからな、ぼくは。しけた教師で、薄給もいいところだからね。でも愛なら……

グローリアはこのロマンチックなプロポーズを最後まで言わせなかつた。

「だめよ、あなた。無理だわ」

グローリアは愛と安楽、ジョズエーとコリオラーノの両方が欲しかったのだ。経験上、貧困がいかなるものか、貧乏がいかにつらいものかを熟知していた。そして、男心がいかに変わりやすいかも。ジョズエーは欲しい。でも、コリオラーノに気取られないよう、ジョズエーには隠密に行動してもらいたかつた。夜になったらやってきて、明け方に出てゆく。窓辺には来ない。挨拶さえしない。その方がいいだろう。背徳の味は増すし、秘密めいていて。

「もしあのじいさんに知れたら一巻の終わりだから。用心に越したことはないのよ」

グローリアが情熱的になっていたことは間違いない。すべてを焼き尽くすあの激しい歓びの夜のあとで、疑うことなどできようか。だが同時に、慎重さと打算も失つてはいなかつた。危険をなるべく減らし、今持っているものをなにひとつ失わないようにしたかつた。リスクはつきものだが、できるだけ小さく抑えておきたい。

「ねえ、あなた。あたしが酷い女じゃないってこと教えてあげる」

「そんなこともう知ってるけど……」

「明日の晩、また来て？ 待ってるね……」

グローリアとの恋がこんな形を取るとは思ってもいなかつた。しかし、だからといって、「もう来ない」と言つてなんになるだろう。愛に伴うリスクを計算し、それをうまく回避しようとする賢明さ、大佐のおこぼれを受け入れさせる抜けない冷静さに傷ついているこの瞬間でさえ、ジョズエーはまた来ないではいられない自分を感じていた。驚きと輝きに満ちたこの愛の床にすっかり虜になっていたのである。もうひとつの愛が始まっていた。

別れの時だつた。扉からそつと抜け出す。八時になれば地理の授業で、

子どもたちに向き合う。その前に少し寝なければ。グローリアは引き出しの鍵を開けて百ミルレイス札を一枚取り出した。

「あげたいものがあるの。これであたしのこと今日一日忘れないで。

何も買ってあげられないから。だって疑われるとまずいでしょ。だから、あたしの代わりに買って…」

ジョズエーは尊大な身振りで拒絶したかった。だが、グローリアは耳たぶを噛んでこう言った。

「靴を買って。歩くときいつもあたしを踏んづけてるって思ってる。要らないなんて言わないでね。ね？ お願いだから」黒靴の裏に穴が空いていることに気がついたのだ。

「靴なら三十ミルレイスもしないけど…」

「靴下も買って…」と言ってグローリアはジョズエーの腕のなかでむせび泣いた。

その日の午後、書店でジョズエーは眠気で死にそうになりながら、今度こそおれはきつぱり詩に戻ると宣言した。今度は肉体の欲びを謳った官能的な詩を書くんだ、と。そしてこうつけ加えた。

「永遠の愛なんか存在しない。どんなに烈しい情熱にもやがては死が訪れる。愛に最期が訪れると、別の愛が生まれるんだ」

「だからこそ愛は永遠なんじゃないか」と、ジョアン・フルジェンシオが結論を出した。「新しく生まれ変わるからこそ永遠なんだよ。情熱は終わり、愛は残る」

窓辺ではグローリアが誇らしげで上品な面もちで老嬢たちに余裕の微笑みを投げかけている。もうだれにたいしても羨望の気持ち起きなかった。孤独が終わりを迎えたのだ。

ガブリエラの歌

こうしてファスチアン生地を着て、靴を履き、ストッキングやらなにやら身につけると、金満家の娘のようにさえ見える。ドナ・アルミンダが拍手した。

「イリエウス広しといえども、だれもあんたの足元にや及ばないね。既婚者、未婚者、娼婦。どれを取っても、あんたに敵う女なんか見たことないよ」

ガブリエラは鏡の前でぐるぐる周りながら自分の姿に見とれている。きれいな格好をするのってなんてステキなの。男は気でも狂ったように、割れ声で囁いてくる。いい男だと、聞くのが楽しい。

「ねえ、ちょっと、あのジョズエーさんが一緒に暮らしてくれって言うのよ！ あんなにいい男が…」

「すっかんぴんよ、あの人。学校の先生だもん。止めなさいって。あんななら他にいくらでもいるんだから」

「まさか、考えてないわ。あの人と暮らすなんて。ただもし、もっと…」
「もっと金持ちの大旦那コ罗纳ルなんかいくらでもいるよ、あんたを欲しがってるのがさ。判事でしょ。それからナシブさん。あの人なんかもう死にそうな騒ぎじゃないか」

「なぜかしら。理由が分からないの、ほんとに」と言って笑う。「だってとってもいい人なんだから、ナシブさん。このごろひっきりなしにプレゼントくれるの。もう要らないよ…年寄りでもなんでもないので…あんなにたくさん。なぜかしら？ あんなにいい人なのに…」

「結婚しようって言ってきたって驚いちゃだめだよ…」
「そんな必要のないのに。どうしてあたしと？ 結婚なんてする必要な

いのに」

ナシブはガブリエラに虫歯を見つけたので、金歯をかぶせてもらうよう歯医者に行かせた。通わせる歯医者は慎重に考えて（オズムンドとシニャジーニャのことが脳裏をよぎった）、港通りで開業しているガリガリに痩せた老人を選んだ。こうして週二回、皿の料理を選び、ナシブの昼食を用意したあと、ガブリエラは例のフラスチアン生地を着て歯医者に通っていた。ところが今やその歯も治り、もう少しで通院が終わりそうなのだ。ガブリエラは残念でしかたがなかった。街を通るときは腰を振りながら歩く。ウインドウヤ人でごった返した通りを眺める。通行人はすれ違いざまに体が触れそうなくらいだ。話に耳を傾け、掛けられる優しい言葉を聞く。エパミノングスさんが寸法を測って生地を売る姿を眺める。帰りがけに、食前酒の客でいっぱいのパールに立ち寄ると、ナシブはきままつて苛々していた。

「なにしに来た？」

「通りかかったから、ちょっと覗いてみようと思つて」

「だれを？」

「ナシブさんです……」

それ以上なにも言う必要はなかった。ナシブはすぐに優しくなるのだった。その様子を老嬢たちが見、男たちが見ている。バジリーオ神父が教会から出てきて、ガブリエラに祝福を与えた。

「神の祝福があるように。わがエリコのバラよ」

なんだか分からないけれど、すてき。なんて楽しいの、歯医者に行ける日って。待合室でガブリエラはつらつらもの思いに耽る。マヌエル・ダス・オンサス大佐だって、なんておかしな名前かしら。あの頑固じいさんたら伝言で、望むならカカオ畑をひとつあたしの名義にしても良いって言ってきたけど。登記所できちんと文書にしてくれるって。畑

ひとつか……ナシブさんがあんなにいい人じゃなかったら、それにじいさんがあんなにじいさんじゃなかったら、きつと受け入れているところだけだな。もちろん自分のためではなかった。ガブリエラにとってカカオ畑がなんの役に立つだろう？ だって、カカオ畑なんかもらつてどうするの？ あたし欲しくないわ、そんなもの……でも、クレメンテのことを思うと、あの人とっても欲しがつてたから……クレメンテ、どこに行っちゃつたのかしら。あのきれいな娘さんのお父さんの畑にまだいるのかなあ？ 技師とつき合っているあの娘さん、かわいそうに。鞭で叩くなんていけないな。なにか余計なことでもしたのかしら。もしカカオ畑もらつたら、クレメンテにあげよう。できたら素敵よね……でもきつとナシブさんが納得しないもん。料理女がいままあの人ほり出すわけにはいかないし。それさえなけりや、受け入れるんだけどな……じいさんは醜くていやだけど、たいていは田舎にいるから、ナシブさんだつて気晴らしに来て、一緒に寝ることだつてできるし……

どうでもいいことならいくらでも考えることができた。考えていて楽しいこともあれば、楽しくないこともある。死んだ人のことを考えると悲しいし、楽しくもない。でも。ときどきふと考えてしまう。旅路半ばで死んだ人たち、とりわけおじさんのことを。かわいそうなおじさん。ガブリエラは小さいころからおじさんによく叩かれた。ベッドにおじさんが入ってきたとき、ガブリエラはまだほんの子供だった。おばが髪の毛をかきながら、卑猥な言葉を叫んだ。おじさんがおばさん突き倒し、平手打ちをいくども喰らわせた。でもおじさんは真底悪い人間ではなかった。あまりに貧しかったのだ。いい人になんかなりやうがない。楽しいことを考えるのは好きだった。裸足になつて土を踏みながら踊る農場でのダンス。おばさんが死んだ後で行ったイリュミネーションで飾られた街。誇り高い人たちのあの豪華な家。ベビーニョのことを考える

のは楽しかった。

歯の治療が終わってしまった。なんて残念なの！ 金歯が入っている。ナシブさんて聖人だわ。お願いもしないのに治療費を払ってくれるなんて。ほんと、聖人よ。こんなにたくさん贈り物くれるの、でもなぜ？

ボールで会うといつも文句を言うけど、あれ、嫉妬かしら…おもしろい…

「ここでなにしてる？ 家に帰れ…」

ガブリエラはしかたなく家に向かうのだった。ファスチアン生地を着て、靴を履いて、ストックキングからなにからすべて身につけて。教会前の広場では子どもたちが輪になって遊んでいた。トニコの娘たちがいる。トウモロコシのような金髪だ。検事の子がいる。片腕が不自由な子がいる。ジョアン・フルジェンシオの健康な子どもたちがいる。バジーリオ神父の代子たちもいる。輪の中ではちびくろトウイースカが歌い、踊っていた。

バラが病気になったとき

カーネーションが見舞ったと

バラの色があせたとさ

カーネーションが泣いたとき

ガブリエラはその横を通り過ぎた。あつ、この歌、あたしも小さいとき歌ったことがある。立ち止まって耳を澄ます。輪がぐるぐる回っている。あれはお父さんとお母さんが死ぬ前、おじさんの家に行く前だったかしら。地面を踏んで踊るあの小さな足、なんてきれいなもの！ ガブリエラも足がうずいてきた。踊りたがっている。もう我慢できなかった。輪になって遊ぶのが大好きなのだ。靴を脱ぐと歩道を飛び出して、子ども

もたちの方へ駆けていった。片手でトウイースカと、片手でロジーニャと手をつなぐ。広場で一緒に輪になって踊り、そして歌った。

手をパン、パン、パン

足をトン、トン、トン

輪をクル、クル、クル

カニは魚だぞ

歌って、踊って、手を叩いた。ガブリエラは子どもに返っていた。

花と花瓶

政争は大聖堂のなかにまで及び、聖ジョルジェ信徒会の選挙にも影響を与えていた。司教としては、アタウルフォ・パッソスが入念に仕上げた配慮の仕方を踏襲して分裂した流れをどうにかひとつにまとめ、バスターの信奉者とムンデイーニョの熱狂的支持者が戦士の聖人を囲んで一堂に会するところを目にしたかったのだ。だが、深紅の帽子を被った真正銘の司教であるにもかかわらず、司教はこれまで成功していなかった。

実を言えば、ムンデイーニョはこの信徒会の一件をあまり重大に考えていなかった。毎月信徒会に献金をしていけば、それで事足りるだろうと考えていた。選挙のさいには、あなたが選んだ候補者に投票するつもりだと司教には伝えてあるし。ところが、会長職を狙う博士は事を慎重に進め、すでに根回しを始めていた。敬虔で献身的なマウリーシオ・カイレスが再選を期している。とりわけ技師の一件がマウリーシオの背を後押ししていた。

恋の騒然とした結末は、イリエウスの町に大きな反響を及ぼしていた。広場で交わされたメルクとローム口の会話を聞いた者などいないはずなのに、十種を下らない噂がまことしやかに囁かれ、そのどれもが他に負けじと事を大げさに語り、技師を悪し様に言う。なかには、技師が並木道のベンチ脇で膝を屈してメルクに許しを請うたと語るたぐいまであった。技師は墮落した怪物で、女性をたらし込み、イリエウスの家族をぞつとするような危険に陥れる破廉恥漢だ、とだれもが言う。『南部報知』には、このうえなく大仰な文体の長々しい記事が掲載され、第一面をすべてを割いても足りずに第二面にまでわたっていた。モラル云々、聖書云々、家族の名誉云々、バストス家の威厳とその模範的生活云々、敵対勢力はそのリーダーからアナペーラまで全員淫蕩だ云々、水際でくい止めなければイリエウスの墮落は世界中に広がってしまうだろう云々。こうしたことを書き連ねているうちに、記事はまるで一面のアンスロジリーになってしまったのである。もつとも、「一面」ではなく数面だった。

「愚劣のアンスロジリーだな…」と隊長は言った。

政治的情熱の、と言ってもよい。というのも、マウリーシオ・カイレス博士が信徒会長に再選されたときの就任演説でこの記事から長々引用したときに、それを玩味したのはとりわけ老嬢たちだったからである。「…議論の余地はあるが益体はない事業を口実に、墮落の中心地からやってきた山師どもが、イリエウスの人々のいとも清廉なる魂を腐敗させようとしているのであり…」技師は放蕩のシンボル、モラル崩壊の象徴になっていた。それはおそらく、この男が怯えてホテルの一室で震え、友人たちに分かれも告げずにこっそりと船で立ち去ったという事実からくるものだった。

もし男が事態に敢然と立ち向かっていたなら、支持する人もきつと

いただろう。ただ、技師にたいする嫌悪がマルヴィーナに累を及ぼすことはなかった。たしかに、映画館や門前で接吻する二人に大騒ぎする者はいても、娘は処女を失っていないとだれもが固く信じていた。だがそれはむしろ、激高した父親に昂然と頭を上げて立ち向かい、鞭を振り下ろすあいだも頭を垂れることなく大声で抗議した娘のことが知れわたり、町の人々に共感が湧き上がったからである。事件から二週間ほど経って、メルセス会の女学校に入れるため、メルクが娘をバイーアに送り出したときも、いろいろな人が港まで見送りに来ていて、そのなかには修道女学校の生徒の姿さえあった。ジョアン・フルジェンシオがキャンデーの袋を渡し、娘の手を握って言う。

「負けるなよ！」

マルヴィーナは微笑んだ。一瞬、娘の冷やかなで誇り高い眼差しと彫像のようなポーズが崩れる。こんなに美しい娘の姿はかつて見たことがなかった。ジョズエーは港に來なかつたが、ボールのカウンターでナシブとしみり話し込んでいた。

「あの娘のことは許すよ」

ますます骸骨のようにやせ細り、目の周りには黒々と大きな隈を作っていたが、口だけはピョンピョンよく跳ね回る。

居合わせたニョー||ガールが、グローリアの微笑む窓辺を見ながら言う。

「なあ先生、なにか隠してないかい。キャバレーじゃちつとも顔見かけないし。おりやき、イリエウスじゅうの女知つて、だれとだれがホの字かぜんぶ分かつてんだけどさ。先生とホの字の女がいなくて…大先生はそんな隈をどこでお作りになつてゐるんですか？」

「研究と学校の仕事が忙しくて…」

「解剖学でも研究なさっているんですかね…そんな研究ならおれもし

てみてえよなあ……」と言いなながら、無遠慮な視線をジョズエーから窓辺のグローリアへと向ける。

ナシブも訝しく思っていた。見たところ、ジョズエーはムラータとの関係にあまりに関心。ガブリエラを冷やかすのもすっかり止めてしまっている。これはなにかあるぞ……

「あの技師のことがあって、ムンデイーニヨ・ファルカンはやや形勢不利になったな……」

「あんなの大したことじゃないよ。きっとムンデイーニヨが勝つ。賭けてもいい」

「そんなに安全パイじゃないぞ。それに、見てみろって、もし勝つたとしても州政府が認めないから……」

アルデイーノ大佐がムンデイーニヨ側に就いたことで、それまでバストス陣営にいた人たちが次々と寝返った。数日の間にピランジのオタヴィアーノ大佐、ムトウンスのペドロ・フェレイラ大佐、アーグア・プレータのアルデイーノアス・デ・ソウザ大佐と続いた。バストス陣営の威光は、完全に消滅したわけではないにせよ、かなり動揺を被っているという印象だ。

ところが、ロームロ事件の数週間後に催されたラミール大佐の誕生記念パーティーは、こうした印象がいかに誇張されているか、まざまざと見せつける結果になった。これほどまでに鳴り物入りのパーティーは初めてだった。朝空に鳴り響きわたる打ち上げ花火が町の目を覚まし、大佐の自宅と行政監督局の建物の前では祝砲と花火に火が点けられる。司教と聖ジョルジュ信徒会が丸となってミサを挙げ、立錫の余地もなく混み合った教会では、セシーリオ神父が女々しい声に熱を込めて大佐の美德を説教する。アリストーテレス・ピレスやイタブーナの行政長官など、大農場主がカカオ地域の隅々から駆けつけていた。大佐の権力は一

目瞭然。自宅には御祝いを述べる客が一日中引きも切らずに押し掛け、高い背もたれの椅子が置かれた客間の扉はずっと開け放たれていた。アマンシオ・レアル大佐は自腹を切つてビールをバールに運び込ませ、今度の選挙にはなにがなんでも勝つぞと息巻く。敵陣営にもラミール・バストスに御祝いを言いに行く者がいて、博士もそのひとりだった。大佐はこうした来客を立つたまま迎え入れていた。権威を示したかったわけではない。頑健なところを見せたかったのである。実は、このところ大佐はかなり弱っていた。以前は、寄る年波こそ隠せないものの、頑健でエネルギーが豊富だった。それが今では手が震えるただのご老体である。

ムンデイーニヨ・ファルカンはミサにも行かなかつたし、自ら出向いて大佐を抱擁することもなかつたが、大きな花束をジェルザに贈り、こう書かれたカードを添えた。「若い友よ、ひとつお願いがあります。御祝いの気持ちを大切なお祖父さんに伝えてください。私は敵陣営にいますが、お祖父さんのことはかねがね崇敬しておりますゆえ」これにはイリエウスの若い娘たちが沸き立った。あの方、超シックよねえ。政治的な対立が致命的な憎悪を意味するこの土地では、こんな言葉など聞いたことがなかつたからである。それになんていう余裕かしら、しかも洗練されて！ 当のラミール・バストス大佐にしてからが、花束を見、カードを読むとこう言った。

「ムンデイーニヨめ、抜け目がないな。孫を使って挨拶を送ってくるとは。断るわけにゆかん……」

一瞬、和解という言葉が大佐の脳裏を横切る。カードを手にしたトニコは、希望の兆しを感じた。だが、兆しはそのまま立ち消えになり、敵意は以前にもまして強まった。ジェルザは、パーティーの締めくくりに行行政長官の貴賓室で催されるダンスパーティーへムンデイーニヨが来

てくれないかと考えていた。積極的に招待したわけではなかったが、来ていただければ大歓迎だと、博士を通してそれとなく伝えておいた。

輸出業者は来なかった。バイアアからあたららしい女性が到着して、自宅で歓迎パーティーを開いたからである。

こうしたことはバールの噂話になった。ナシブも会話のすべてに首を突っ込んでいた。ダンスパーティーのつまみとデザートの出出しはナシブに発注されており、若いジェルーザが直接ガブリエラと話をし、パーティーに欲しいものを指示していた。帰り際、ジェルーザがナシブに言う。

「ナシブさんの料理番さんで美人だし、とっても感じの良い方ね。」その言葉を聞いて、ナシブはガブリエラが聖女に思えた。

飲み物はフリーニオ・アラサーに注文が行っていた。老ラミーロはこれの不興も買いたくなかったのである。

ナシブはたしかに噂話に首を突っ込んでいた。だが、夢中になれたわけではない。政治的事件であれ、社会的事件であれ、町で起きるどんな出来事も——長距離バスがひっくり返って四人の負傷者を出し、うち一人が死亡したという事件さえ——自分の抱えている問題から気を逸らせなくてはくれなかった。ガブリエラと結婚する——トニコがあるとき打ち上げたこのアイデアが、頭の中で勝手に独り歩きをしていた。他に解決策は見つからなかった。ガブリエラを愛している。それは間違いない。愛は限りなく広がっている。飲むべき水のように、摂るべき栄養のように、眠るべきベッドのようにナシブにはガブリエラが必要だった。そしてバールにしても、ガブリエラなしでは寸毫も立ちゆかない。今の繁盛も——銀行にはお金が貯まり、カカオ畑がいよいよ近づいていた——この娘が立ち去ればたちまち終わるだろう。結婚をすればそんな心配もしなくてすむ。ナシブにとってこれ以上都合な提案があったらどう

か？ それに、ガブリエラをバールの主人に据え、下に料理女の三四人も雇って、ガブリエラには味付けだけを見させれば、長年培ってきた夢も実現できるではないか。レストランを開くという夢を。町にはレストランがなかった。ムンディーニョ・ファルカンは繰り返言っていた。イリエウスには良いレストランがぜひとも必要だ。ホテルの食事は最悪。独身男は賄い付きの下宿屋でまずい冷や飯をがまんするしかない。船が入港しても、一時下船する乗客たちに美味しい食事を提供できる場所さえない。なにかの記念パーティーで大宴会を開こうにも、一般家庭のサロン以外にどこでできるといえるのか？ ムンディーニョには、レストランの開業に必要な資金を進んで提供する用意があった。あるギリシヤ人夫婦がこれを狙って場所を探しているという噂が流れていた。ガブリエラが間違いない料理長になってくれるなら、ナシブにもレストランを開くことができるだろうが。

だが、間違いなく料理長になってくれるという保証はあるのだろうか？ 一日でいちばん悩ましい昼寝の時間、ナシブはデッキチェアに横たわり、もの思いに耽っていた。火の消えた葉巻が苦みを口に残し、髭は力無く垂れ下がっている。赤茶けた縮れ毛の女子言者、ドナ・アルミンダが恐ろしい警告を発してからさほど日は経っていない。ガブリエラが他人のプロポーズに初めて心を動かされたのだ。ドナ・アルミンダは、マヌエル・ダス・オンサスの申し出に娘の心が揺れるようすを、嗜虐的なまで飲びに満ちた表情で、微に入り細を穿って描写した。だって少なくとも三千キロのカカオがなる畑よ。よろめかない女なんかないわ。ナシブもドナ・アルミンダもクレメンテの存在を知らなかった。この二人はガブリエラのことなどほとんどなにも知らなかったのである。気も狂わんばかりの数日が過ぎた。結婚という言葉が喉元まで出かかったことも一度だけではなかった。だが、ちょうどそのときだった。

ガブリエラがプロポーズを断った、間違いない、とドナ・アルミンダが知らせてくれた。

「あんな娘さん見たことないわ……ぜったい嫁さんにすべきだね。めっけもんだよ」

ということとは、まだ限界には来ていないということか。「どんな貞淑な女にも、我慢に限度はあるもんだ」ニョー＝ガールが例の鼻にかかった声でそう言っていた。まだガブリエラが天井値に達してないとしても、あの娘の我慢が限度に達してないとしても、そうなるのは時間の問題だ。だって事実、今回のプロポーズに心が揺れ動いたではないか？ もしマヌエル・ダス・オンサスが、カカオ農場に加えて、街に家まで持たせてやると言ったら？ 自分の家が持てることほど女にとって喜びはないからなあ。良い例がドス・レイス姉妹だ。どんな大金を積まれても、住居用に使っている家も、貸し出している家も手放さないんだから。マヌエル・ダス・オンサスは切り札をいくらでも持っている。農園には金が湯水のように流れているし、今年の収穫——大豊作！——で、ますます大金持ちだ。家族を住まわせる御殿をイリエウスに作っているけど、御殿には塔まであって、そこからだと町全体ばかりか港の船や鉄道まで見渡せるそうじゃないか。爺さん、気が狂ったようにガブリエラに執着しているから、どんな大金でも払うつもりにちがいない。

ドナ・アルミンダにはしじゅう結婚はどうしたと迫られ、毎日午後一番にはバールでトニコに尋ねられる。

「で、アラブ人よ。結婚は決めたか？」

心の中では決心がついていた。心はもう揺れていない。実行を先送りしてきたのは他人の噂が怖いからだだった。おじ、おば、姉、義兄、イタプーナの親戚、誇り高いあのアシユカール家の人々。でも結局、あの人たちがおれにとって何だと言うんだ。カカオで良い生活をしているイ

タプーナの親戚なんか、おれに関心さえ持っていないじゃないか。おじに借りはないし、義兄なんか、あんなのくたばつちまえ。友だち、バールの常連客、バックギャモンとポーカーの遊び仲間。トニコを抜かして、あいつらがおれのことを気に掛けてくれたことがあったか？ ガブリエラにまとわりついて、おれの目と鼻の先で取り合っているだけじゃないか。あんなやつらのことを気にする必要がどこにある？

その日の昼食前、バールでは多くの客が政治と港口を話題にしていた。バストス陣営によってある噂が仕込まれ、流されていた。技師の報告書が棚上げになり、港口の問題は永遠に葬り去られた。これいじょうこの問題をつついてもなんにもならない、解決の見込みはない、という噂である。信じる者は多かった。ボートに乗って港口の砂の深さを測る技師の姿はたしかにもう見かけない。しかも、ムンディーニョ・ファルカンは船でリオに行ってしまった。バストス支持者たちの顔は輝いていた。アマンシオ・レアルはリベリニョに再度賭を申し込む。タグボートも浚渫船も来ない方に二千万レアル賭けるというのだ。またもやナシブが証人として呼ばれた。

おそらくそのためだろう。いつものように食後の苦味酒をひっかけにやってきたトニコはやけに機嫌が良かった。キャバレー通いも再開して、今度は髪を三つ編みにしたセアラ州出身の娘に夢中だ。

「人生って素晴らしいなあ……」

「あんたが満足なのは当たり前だ。新しい女の子がいるんだから……」

トニコは爪の垢を楊枝でほじくりながらうなづく。

「ほんとうに満足だよ……港口の工事は頓挫するし……セアラ娘は燃えてるし……」

最終的にナシブの決心を促したのはマヌエル・ダス・オンサス大佐ではなく、判事であった。

「おい、アラブ人。相変わらずふさいでんのか？」

「他にどうしろってんだ」

「もつとふさぎ込めって。あんたに嫌なニュースを持ってきたぜ」

「なんだって？」 ナシブの声が気色ばむ。

「あのな、判事だよ。あいつがクワトロ・マリボザスの路地裏に家を借りたって……」

「いつ？」

「昨日の午後だ」

「だれのために？」

「だれのためだと思おう？」

ハエの羽音が聞こえるほどの沈黙があった。昼食から帰ってきたシコ・モレーザが割って入った。

「ガブリエラさんが、これから外出するけどすぐに帰ってくるってご主人さまに言つといてということですよ」

「なんで外出するんだ？」

「いやそれは。なにか足りないものを買いにゆくようでしたけど」

トニコが皮肉っぽい目でナシブを見る。ナシブは尋ねた。

「結婚の話、あれは本気で言ってるのか？ 本当にあんたの意見なのか？」

「もちろんだよ。言っただろ、もしおれだったら……」

「おれも考えてみた。やつぱりそれが良いって……」

「決めたのか？」

「でも問題があるんだ。助けてもらえとありがたいんだが」

「さあ、抱き合おうじゃないか。おめでとうー トルコ人、幸せになー！」

抱擁のあとでもまだ不安な表情でナシブは続けた。

「調べてみたんだ。そしたらあの娘、身分証明書持ってないんだ。出生証明書もないし、誕生日も分からない。父親の名前も知らない。みんな小さいときに死んじゃたから、なんにも知らないんだ。おじさんはシルヴァだけど、母方の兄弟だから。自分の年齢も知らないし、とにかくにひとつ分からないんだよ。どうしたら良い？」

トニコはナシブに顔を近づけた。

「おれはあんたの友だちだ。力になるぜ。身分証明書のことは心配ない。登記所ですべてうまくやるから。出生証明書も、父親の名前も母親の名前もうまくでつち上げる。ただひとつ条件がある。おれに仲人をやらせてくれないか……」

「大歓迎だ……」 ナシブは突然何かから解放されたような気持ちになった。快活さがどつと戻ってきた。暖かな陽光が、心地よい海風が肌に感じられる。

ちようどそこにジョアン・フルジェンシオが入ってきた。書店を開ける時間だ。トニコが叫ぶ。

「ニュース、知ってるか？」

「たくさん知ってるが、どのニュースだ？」

「ナシブが結婚するんだ……」

ふだん落ち着き払っているジョアン・フルジェンシオも、このときばかりは驚きを隠しきれなかった。

「ナシブ、本当か？ 婚約したなんて、知らなかったぞ。幸せなお相手はだれだ。聞いていいか？」

「さてだれでしょう。当ててみな……」とやってトニコが微笑む。

「ガブリエラですよ」とナシブが言った。「好きなんだ。あの娘と結婚する。だれがなんと言おうと……」

「少なくともこれだけは言える。あんたは気高い魂の人間だ。善良な

男だ。それだけは誰が見ても間違いない。おめでとう！」

ジョアン・フルジェンシオはナシブを抱きしめた。ただ、目は不安そうだ。ナシブが執拗に頼む。

「助けてください。うまくやれますかね？」

「ナシブ。そういうことにわたしは助言できないよ。うまく行くかどうかなんて、だれに分かる？　うまく行って欲しい。言えるのはそれだけだ。ただ……」

「ただ？」

「あんたもさんざん花を見てきたから分かんと思うが、花というものは枝にいたり庭に咲いているかりぎは美しくて薫り高い。ところが花瓶に移すと、それが銀の花瓶でも、枯れて死にまうものだ」

「なぜあの娘が死ななきゃならないんです？」

トニコが話を遮る。

「さあさジョアンさん、詩の話は止めて……こりやリエウスでいちばん楽しい結婚式になりそうだ」

ジョアン・フルジェンシオも微笑んで頷いた。

「われながら馬鹿げたことを言ったよ、ナシブ。心からおめでとうと言わせてくれ。あんたの振る舞いはほんとうに高貴な人間の振る舞いだ。洗練された人間の」

「お祝いの乾杯と行こうじゃないか」トニコが言う。

海からは微風がそよぎ、陽の光がきらめいている。ナシブの耳には小鳥のさえずりが聞こえていた。

浚渫船と花嫁

それはイリエウスでいちばんにぎやかな結婚式だった。判事（ガブリ

エラに脈がないことを知って失望し、クワトロ・マリボザスの路地裏に借りた家に別の娘を困った判事は、その娘も連れて来ていた）がスピーチに立ち、社会の因習と階級差の壁を乗り越えて真実の愛で結ばれたこの新婚夫婦の門出を祝った。

空色のドレスを着て、足が痛くなるほど小さな靴を履き、唇におずおずとした微笑を湛えた伏し目がちのガブリエラは、うっとりするほど魅力的だった。盛装に身を包んだ公証人トニコがガブリエラの腕を取って居間に入ってくる。サン・セバステイアン坂の自宅は人でいっぱいだった。招待客も、そうでない人も、だれもがこのショーを見逃すまいとやって来ていた。結婚の話打ち明けてから、ナシブはガブリエラをドナ・アルミンダの家に預けていた。娘が婚約した相手と同じ屋根の下で寝るのでは世間体が良くない。

「なぜなの？」とガブリエラは訊く。「そんなことどうでもいいのに……」

いや、どうでも良いことではなかった。今やガブリエラは婚約者、もうすぐ花嫁になる身なのだから、どんなに用心してもしすぎることはない。そのことを伝えてから、さあ、手を出してごらん、と言うと、ガブリエラはしばらく考え込む。

「ナシブさん、なぜなの？　そこまでする必要はないでしょ……」

「じゃ、やだってことかい？」

「どうしてもやだってわけじゃないのよ。でも、そこまでしなくてもこのままの方がいいから」

当座しのぎに使用人を二人雇うことにした。一人は家のことをやってももらい、もう一人、若い方には料理を教える。その後で、今度はレス・トラン用にまた別の娘を雇おうとナシブは考えていた。家を塗り直させ、新しい家具を買う。服、ペチコート、靴、ストッキングといった嫁入り道具選びは、ナシブのおばが手伝ってくれた。最初はこの結婚に驚いて

いたおじも親切にしてくれる。ガブリエラを泊める家を提供しようと言ってくれた。しかしナシブは申し出を断った。ガブリエラなしでの数日をどう過ごせよというのか。自宅の庭とドナ・アルミンダの庭を分かち垣根は低かった。ガブリエラは野性の子ヤギよろしく脚を見せながら垣根をぴよんと飛び越える。ナシブと寝るために夜になるとこうしてやって来るのだった。姉と義兄は話を聞こうともせず、ナシブと絶縁してしまった。イタブーナのアシユカール家は贈り物を贈ってきた。貝殻でできたランプシェード。一見の価値のある珍品である。

マリンプルーの服で身を固め、ラベルホールにカーネーションを挿し、豊かな髭を蓄えたナシブの姿をひと目見ようとあちこちから人が集まっていた。ガブリエラは伏し目がちに微笑んでいる。ナシブ・アシユカール・サアド、フェラーダス生まれ、イタブーナにて戸籍登録、商店主、当年三十三歳。ガブリエラ・ダ・シルヴァ、イリエウス生まれ、同地に戸籍登録、主婦業、当年二十一歳。判事がふたりの結婚を宣言した。

自宅は人で立錫の余地もなく混み合っていた。男は多いが、女はあまりいない。結婚式の証人を務めているトニコの妻、トニコの姪で金髪のジェルーズ、善良至極かつ純朴至極な隊長カピタンの妻、満面に笑みを湛えたドス・レイス姉妹、六人の子どもの快活な母親であるジョアン・フルジェンシオの妻、それだけである。その他の女たちは見に来る気もなかった。結婚式なんてどうせどれも似たり寄ったりよ。テーブルに食べ物が置いてあって、飲み物はご自由にでしょ、というわけである。家に収まり切らずにあふれ出した人が、通りまで埋め尽くしていた。イリエウスにはかつてないにぎやかな結婚式である。プリーニオ・アラサーも、日頃の対抗意識を棚上げにして、シャンパンを運び込んでくれた。この頃まだ宗教的な結婚式が主流だったが、今回は違っていた。みんなナシブがムスリムだということに気づいたのはこのときである。もともと、イリエ

ウスに住んでからというもの、ナシブはアラームハンマドも抛り出してた。ただ、だからといって、ナシブがキリストやヤハウエに帰依したわけではない。そんなことにはお構いなしにバジール神父はガブリエラに会いにやってきて祝福を与えるのだった。

「わがエリコのバラよ。たくさんたくさん子どもを生みなさい」
そしてナシブには脅すように言う。

「子どもたちは私が洗礼を施すからな。あんたが望もうと望むまいと……」

「わかりました、神父さま……」
披露宴はおそらくこのまま夜更けまで続いていたに違いない。黄昏が長々と続く通りで誰かが叫び声を上げなかったなら。

「おい見てみる。浚渫船がやってくるぞ……」
通りで慌ただしい人の動きがある。リオから戻ってきたムンデイナーニョ・ファルカンは、ガブリエラのために真っ赤なバラの花束を、ナシブのために銀のシガレットケースを持って新婚夫婦を訪れているところだった。微笑みを湛えながらも大急ぎで通りに入る。ちようど四艘の浚渫船を先導して二艘のタグボートが港口を通過するところだった。だが歓呼の声を上げた。続いてたくさんの人たちが歓呼の声を上げる。次々と客が帰り始めた。ムンデイナーニョが先頭を切り、隊長カピタンと博士ドクトールがそれに続く。

宴会は埠頭と荷揚げ場に場所を移した。家にぐずぐずしていたのは、ジョズエーと靴修理のフェリーペの他には女性陣だけ。グロリアもこの日ばかりはいつもの窓を離れて、舗道から様子を眺めている。最後まで残っていたドナ・アルミンダがお休みを言って出てゆくと、瓶と皿がぐちゃぐちゃに散乱した人気ない家でナシブはガブリエラに言った。

「ビエ……」

「ナシブさん…」

「なんでナシブ『さん』なんだい？ 夫だよ、ぼくは。もう雇い主じゃないんだよ…」

ガブリエラは微笑んで靴を脱ぐと、裸足で部屋の片づけを始めた。ナシブはガブリエラの手を掴むと叱る。

「これからもうそうやっちゃだめだ、ピエ」
「なにを？」

「靴を履かないで歩くの。もう奥さまなんだから」
ガブリエラはびつくりした。

「だめなの？ 靴脱いで裸足で歩いちゃ」
「だめだ」

「でもどうして？」
「きみは奥さまだからさ。地位もお金もある奥さまだから」

「でもナシブさん。あたしそんなじゃなくて、ただのガブリエラよ」
「じゃ、これから教えてあげる」、と言うと妻を両腕に抱きかかえてベッドに連れて行った。

「すてきなだんなさん…」

港では大勢の人たちが声を上げ、手を叩いている。誰がどこからか見つけてきたのだろう。すっかり暗くなった夜空に火花が上がり、その光が浚漕船の進路を照らす。ロシア人ジャコブがすっかり興奮して、だれにも理解できない言葉でまくし立てていた。タグボートが汽笛を鳴らしながら港に入っていくのだった。

(続く)